八戸工業大学紀要　第 40 巻（2021） pp.135-143

# 教師のキャリア発達に関する研究（１）
# ～PAC 分析による初任教師の意識～

佐藤 昭雄†

# Research on career development of teachers（1）
# ～ Awareness of novice teachers by PAC analysis ～

Akio SATO†

**ABSTRACT**

Using the PAC analysis method, we clarified the changes in thinking, feelings, and awareness caused by actually standing in the field of education as teachers for four novice teachers. What all four novice teachers have in common is ① awareness of the "difference" between the image of a teacher when he was a student and the actual image of a teacher, and ② that there are various students, various teachers, and various jobs in the field of education. It was an awareness of "diversity". In addition, ③ increased awareness of "work" (sense of responsibility, fulfillment, busyness, etc.) as a member of society and professionals was also recognized.

However, on the other hand, ④ the search for a method for solving the problem and the acquisition of skills for solving the problem have not been achieved. Also, the teacher's work is more diverse and busy than I expected, but I also feel the fun and fulfillment there, so ⑤ I haven't realized switching between work and private, time management, work management, overcoming it and feeling busy.

***Key Words:*** *teacher, career development, PAC analysis*

**キーワード :** 教師，キャリア発達，PAC分析

## 1. 問題と目的

文部科学省（2011）は、「人が生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見出して行く連なりや積み重ね」を「キャリア」と定義している。そして、「人は、他者や社会とのかかわりの中で、職業人、家庭人、地域社会の一員等、様々な役割を担いながら生きている。これらの役割は、生涯という時間的な流れの中で変化しつつ積み重なり、つながっていくものである。また、このような役割の中には、所属する集団や組織から与えられたものや日常生活の中で特に意識せず習慣的に行っているものもあるが、人はこれらを

令和 2 年 11 月 13 日 受付

† 青森県立八戸北高等学校・校長

含めた様々な役割の関係や価値を自ら判断し、取捨選択や創造を重ねながら取り組んでいる。」「人は、このような自分の役割を果たして活動すること、つまり『働くこと』を通して、人や社会にかかわることになり、そのかかわり方の違いが『自分らしい生き方』となっていくものである。」「このように、人が生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見出して行く連なりや積み重ねが『キャリア』の意味するところである。」と述べている。更に「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程を『キャリア発達』」と述べている。

兵庫教育大学大学院の浅野良一（2007）は、エドガー・シャインのキャリアサイクルの考え方をベースにキャリア発達図を描いており、30代前半と40代半ばに大きな転機があると指摘している。つまり、発達とは一定均一のものではなく、その段階その段階に応じた期待と役割があり、その時「自分は何ができるのか」「自分にとって仕事とは何か」を突き詰め、意識と行動を変化させていく必要があり、それが出来れば次のステップに移行できるし、出来なければそこにとどまり停滞を招くというのである。

他の職業人と同様に教師にも教師のキャリアというものがあり、キャリア発達が存在する。浅野氏は、教員のキャリア形成と能力開発の実際を20代から50代までを年代ごとに表にまとめ、「キャリア段階」「職能課題」「開発の実際」を整理している。

また、名古屋学芸大学の安井克彦（2013）は、「教師のキャリア発達と力量形成に関する研究」において、教師は、いつ、どんな力量を獲得し、それを促す要因はどこにあったのかを11人の小学校校長からの聞き取り調査で明らかにしている。

また教科に特化したものとしては、九州大学の案浦信子（2008）が「高校英語教師のキャリアの連続的発達」において、発達の連続生を保証する要因を先行研究とインタビューで明らかにしている。

また、初任教員の教師キャリアの発達に関して、斎藤俊則・都丸けい子・大野精一（2010）が自由記述の質問紙により、平均教職年数20年の教員26名を対象とした調査研究を実施している。

更に、京都市総合教育センター指導主事の河野由佳（2014）は、管内小中学校243校の若手教員335名、教務主任243名のアンケート調査から教員の研修や教師力向上に関する意識を明らかにしている。その結果、若手教員は「子ども理解」「実践的指導力」「教科等に関する専門的な知識」を高めたいと考えているのに対し、教務主任は「子どもに対する愛情や責任感」や「総合的な人間力（社会性や常識など）」を高めて欲しいと願っていることが明らかになった。

以上のことから、教師のキャリア発達に関する研究は、一般的な職業キャリアを教師に当てはめた理論研究や、管理職や中堅教員に自己を振り返るかたちでの聞き取りの調査や自由記述調査をしたもの、また、若手教員と教務主任の研修ニーズのアンケートによる比較調査であり、実際に教壇に立ったばかりの初任教師の意識というには、対象や方法が十分とは言えない状況であった。

そこで、本研究では大学を卒業後3年以内の初任教員を対象とし、質問による回答への誘導・影響を排除し、尚且、個人的な感想や主観的な解釈による分類整理を避けて、自由記述の回答をパソコンによる統計処理にかけ、更にその解釈を本人に委ねた分析手法であるPAC分析を採用した。

PACとはPersonal Attitude Constructの略で「個人別態度構造」という意味である。つまり、あるテーマについて個人が持つイメージや態度のことで、自由連想とクラスター分析により、普段意識していない潜在的な部分を浮かび上がらせようとするものである。
信州大学の内藤哲雄（1997）が開発した研究手法である。

教師を被験者としたPAC分析に関する研究としては、弘前大学の長谷川（2001）、佐藤（2001）が不登校生徒にかかわる教師の意識の変容を、山形大学の新舘・松崎（2001）が教師の自己成長

をPAC分析を用いて明らかにしている。また、佐藤（2005,2008）に関しては、カウンセリング体験の被験者や、カウンセラーの教育分析にもPAC分析を用いている。

## 2. 対象

大学を卒業し、初めて高等学校の教壇に立った３年以内の教員４名（本稿ではそれを初任教師と呼ぶ）を対象に、PAC分析の手法を用いて教師として実際に教育現場に立ったことによって生ずる、考え方や気持ちの変化、気づきを明らかにすることにした。

## 3. 方法

教員志望の大学生が大学を卒業し、初めて高等学校の教壇に立ったことによる意識の変化を捉えることを目的としたため、自由連想、多変量解析、現象学的データ解析手法を通じて、間主観的に個人ごとの意識や変容を捉える内藤（1997）のPAC分析を用いて意識のあり方や変容を把握することとした。

PAC分析の詳細な手続きは割愛するが、①対象者に連想刺激を教示して自由連想を求め、②自由連想により得られた反応項目間の心理的距離による距離行列を作成し、③それを統計処理によりクラスター分析を行って結果をデンドログラムで表現し、④対象者とともにクラスターの解釈を行いながら意識を明らかにしていくという方法である。

今回PAC分析を用いたのは、質問紙による意識調査では、教師としての防衛が入りやすく、特に職業柄、望ましさで答えてしまうことが予想されるし、面接調査では、研究者の誘導や主観的な解釈が入りやすいと判断したからである。

## 4. 結果と考察

【１】対象者A（講師経験１年、新採用１年）

（１）連想項目とクラスター

X1　学校によって生徒や教員の色が異なる。
X2　学校の目標に沿って行事等が行われるため生活が学校毎に異なる。
X3　授業以外の仕事がたくさんある。
X4　生徒を考えさせるには教員の誘導が必要である。
X5　予想以上に多くの個性に出会う。
X6　自分が習ってきた授業と形態も内容も違う。
X7　今の生徒たちと幼少期の環境が少し異なっている。
X8　野球人口が激減している。
X9　土地柄でも違いがある。

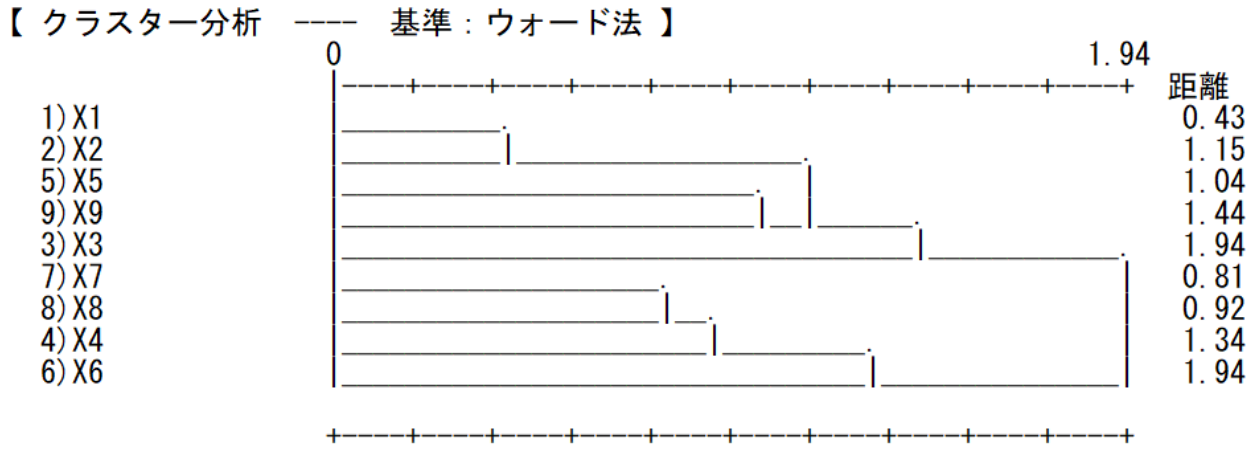


図1　対象者Aのデンドログラム

（２）本人によるクラスターの意味づけと解釈

統計処理によるクラスター分析のデンドログラムを、本人は３つのクラスター（まとまり）として意味づけた。

クラスター１は、「X1　学校によって生徒や教員の色が異なる。」「X2　学校の目標に沿って行事等が行われるため生活が学校毎に異なる。」という２項目のまとまりで、教育現場は学校による違いが大きいということを指摘した。

クラスター２は、「X5　予想以上に多くの個性に出会う。」「X9　土地柄でも違いがある。」「X3　授業以外の仕事がたくさんある。」という３項目。学校にはいろいろな個性の生徒や先生方がいるし、地域によってもまた気質や性格が違う。また、学生時代には見えていない沢山の仕事があることに驚きを感じていると述べた。

クラスター３は、「X7　今の生徒たちと幼少期の環境が少し異なっている。」「X8　野球人口が激減している。」「X4　生徒を考えさせるには教員の誘導が必要である。」「X6自分が習ってきた授業と形態も内容も違う。」

自分の小さい頃や高校時代に比べ、教育環境や授業のあり方が変わって来ているという実感を指摘した。

Aは、教育現場は学校や地域、時代によって大きく異なるという『違い』を強く感じており、教育現場の多様性を強く意識している。

【２】対象者B（同一校３年目の初任教員）

（１）連想項目とクラスター

Y1　授業以外の仕事がたくさんある。
Y2　いろいろな性格や考え方の生徒がいる。
Y3　話を聞いて欲しいと思っている生徒がたくさんいる。
Y4　体育の授業は生徒が盛り上がる分安全面が重要
Y5　生徒は教師の仕草や発言をすごくよく見たり聞いたりしている。
Y6　たくさんの生徒と話したり関わったりすることが楽しい。
Y7　生徒自身の問題だけでなく家庭環境などによって生徒の性格や行動が変わってくる。
Y8　早退させないで欲しいなど難しい要求をしてくる保護者とのやりとりが大変
Y9　教師側がなんとなく言ったことでも生徒は気にしていたりよく覚えている
Y10　部活や授業などに力を入れている先生方は朝早くから夜遅くまで学校に残って仕事している
Y11　担任の考え方やクラス経営の仕方によってクラスの雰囲気がすごく変わる

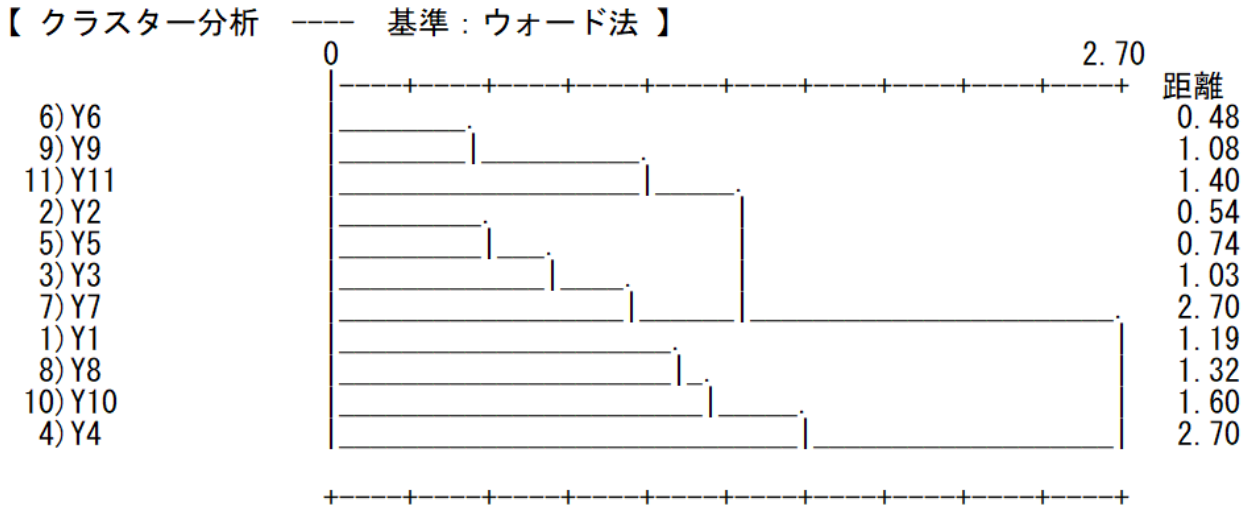


図2　対象者Bのデンドログラム

（2）本人によるクラスターの意味づけと解釈

Bは、**図**2のデンドログラムから、以下３つのクラスターとして意味づけた。

クラスター１は、「Y6　たくさんの生徒と話したり関わったりすることが楽しい。」「Y9 教師側がなんとなく言ったことでも生徒は気にしていたりよく覚えている。」「Y11 担任の考え方やクラス経営の仕方によってクラスの雰囲気がすごく変わる。」の３項目で、生徒とかかわることは楽しいが、想像以上に教師の考え方やかかわりの影響を生徒は強く受けているし、またよく覚えているという感想を述べている。

クラスター２は、「Y2　いろいろな性格や考え方の生徒がいる。」「Y5　生徒は教師の仕草や発言をすごくよく見たり聞いたりしている。」「Y3　話を聞いて欲しいと思っている生徒がたくさんいる。」「Y7生徒自身の問題だけでなく家庭環境などによって生徒の性格や行動が変わってくる。」の４項目で、多様な生徒の存在を指摘している。また、性格や行動の違う生徒、家庭環境の違う生徒でも、どんな生徒も教師に注目し、自分に感心を向けて欲しいと思っていると述べる。

クラスター３は、「Y1　授業以外の仕事がたくさんある。」「Y8　早退させないで欲しいなど難しい要求をしてくる保護者とのやりとりが大変。」「Y10部活や授業などに力を入れている先生方は朝早くから夜遅くまで学校に残って仕事している。」「Y4　体育の授業は生徒が盛り上がる分安全面が重要。」の４項目のまとまりで、多様な教師の仕事。授業以外の仕事も沢山あって、難しさを感じるとも述べている。

Bは、多様な生徒の存在と多様な教師の仕事を強く意識していて、『多様さ』がキーワードになっている。

【３】対象者C（新採用１年）

（1）連想項目とクラスター

Z1　大学生の時の模擬授業のように楽しいことばかりの授業は考えられないと感じた。
Z2　同じ年次の先生と足並みをそろえて授業を進めていくことの大変さ。
Z3　思っていた以上に生徒の気持ちを察することは難しい。
Z4　本当はもう少し休みがあると思っていた。
Z5　適切・的確に生徒を叱る難しさ。
Z6　なぜ自分は教師になりたいかを学生の頃に自分にとことん向き合って考えてよかった。
Z7　生徒との関わりは思っていた以上に楽しく元気をもらえる。
Z8　生徒に学力を付けさせなければというプレッシャーがある。
Z9　仕事を割り振る力も仕事ができることの大切な要素だと感じた。
Z10　教えることの責任と毎回の授業が本番という意識。
Z11　自分が知っていることと教えることは違う（指導力不足を痛感）。
Z12　自分のイメージづくりの大切さ（生徒が捉える私、他の先生がかかわる私）。
Z13　生徒と仲良くすることとなれ合うことのボーダーラインの見極めが難しい。
Z14　社会人としての自己管理の難しさ。

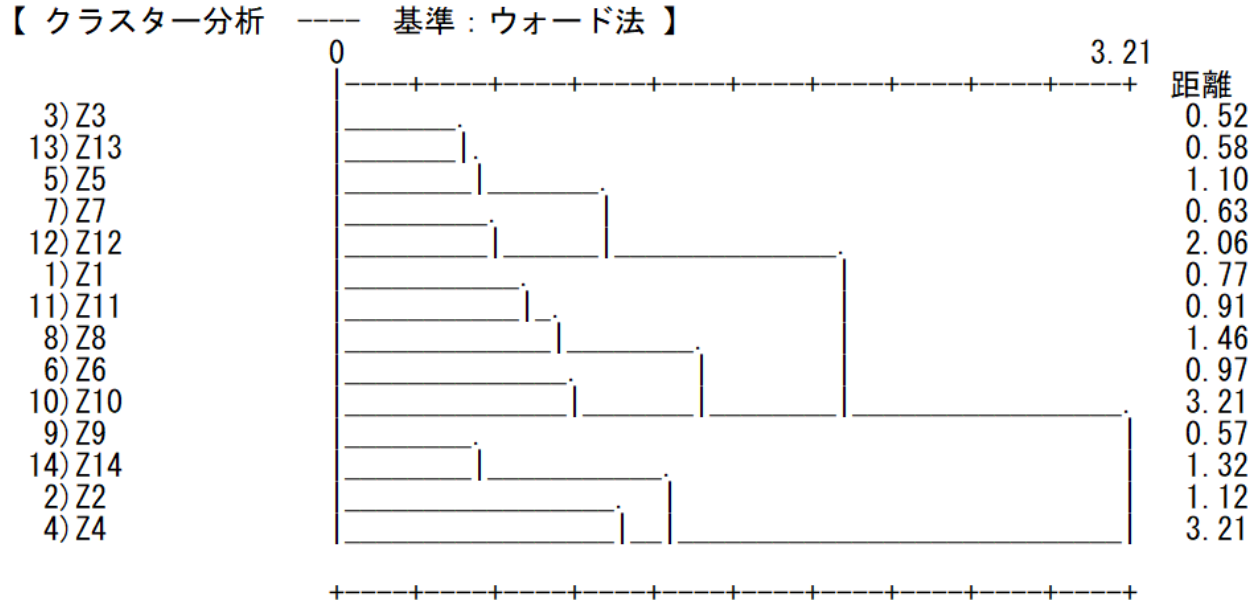


**図3**　対象者Cのデンドログラム

（2）本人によるクラスターの意味づけと解釈

Cは以下４つのクラスターとして意味づけた。

クラスター１は、「Z3　思っていた以上に生徒の気持ちを察することは難しい。」「Z13　生徒と仲良くすることとなれ合うことのボーダーラインの見極めが難しい。」「Z5　適切・的確に生徒を叱る難しさ。」を一つのまとまりと捉え、生徒は一人一人違うので生徒理解と生徒指導の難しさを感じると述べた。

クラスター２は、「Z7　生徒との関わりは思っていた以上に楽しく元気をもらえる。」「Z12 自分のイメージづくりの大切さ（生徒が捉える私、他の先生がかかわる私）。」の２項目で、教師の仕事はかかわりの難しさとともに楽しさや充実感も得られる。また、自分が生徒からどう見られているかも気になり、自分なりの教師像みたいなものが必要な気がしていると指摘している。

クラスター３は、「Z1　大学生の時の模擬授業のように楽しいことばかりの授業は考えられないと感じた。」「Z11 自分が知っていることと教えることは違う。（指導力不足を痛感）」「Z8　生徒に学力を付けさせなければというプレッシャーがある。」「Z6　なぜ自分は教師になりたいかを学生の頃に自分にとことん向き合って考えてよかった。」「Z10 教えることの責任と毎回の授業が本番という意識。」の５項目。

教育現場に立つと常に自分が試されている気がする、学生時代の表面的なスキル中心の授業では、生身の生徒や思いもよらない反応をする生徒に対応出来ず、自分の力量不足を感じる。また、教育現場で求められている学力の定着や進路の実現に対して、教師としての責任を感じる。このような戸惑いや悩みや不安に対して、ただなんとなく教師になるのではなく、自分なりになぜ教師になりたいのかを学生時代に模索し、突き詰めておくことは大切だと思う。教師になってから突き当たる壁や挫折感を乗り越える力になると思うと述べている。

クラスター４は、「Z9　仕事を割り振る力も仕事ができることの大切な要素だと感じた。」「Z14　社会人としての自己管理の難しさ。」「Z2　同じ年次の先生と足並みをそろえて授業を進めていくことの大変さ。」「Z4　本当はもう少し休みがあると思っていた。」

という４項目。

教師以前に、社会人・職業人としての力量、仕事の調整力や自己管理能力、他者との協調性などが必要なんだと自覚した。教師の仕事はもっと休みがあると思っていたが、放課後や土曜日・日曜日の部活動や講習、模擬試験など本当に時間がないと感じている。教師の仕事は多様で、授業以外にも沢山の仕事があることがわかったと述べた。

Cは、生徒は一人一人違うので、生徒理解と生徒指導の難しさを感じる反面、教師の仕事の楽しさや充実感を実感している。また、自分が生徒からどう見られているかも気になり、自分なりの教師像みたいなものが必要な気もしている。そして、教育現場に立つと常に自分が試されている気がしており、自分の力量不足を感じるとともに、教師としての責任を感じている。

学生時代に、自分はなぜ教師になりたいのかを突き詰めておくことはその後の壁や挫折を乗り越えるために大切だと述べていて、学生時代というモラトリアム期の中で、とりあえずのアイデンティティの確立の必要性を指摘している。

【４】対象者D（同一校３年目の初任教員）

（１）連想項目とクラスター

O1　仕事のことを考えない時間が無い
O2　同教科間の先生方の間で共通理解を持つ機会が思った以上に少ない
O3　仕事の終わりを見つけ出せない
O4　研究や論文を読んだりして仕事に活かすということが思った以上に出来ない
O5　勉強して身についているという感覚が大きいので遅くまで残っても精神的疲労はない。
O6　意外と先輩の先生方にコアな教育論や教科論を聞けない
O7　休めているという感覚が無い
O8　成果に対する責任を思っていた以上に感じる
O9　仕事の内容ばかりで教養を身につけていない
O10　誰がやるか決まっていない仕事が結構多い

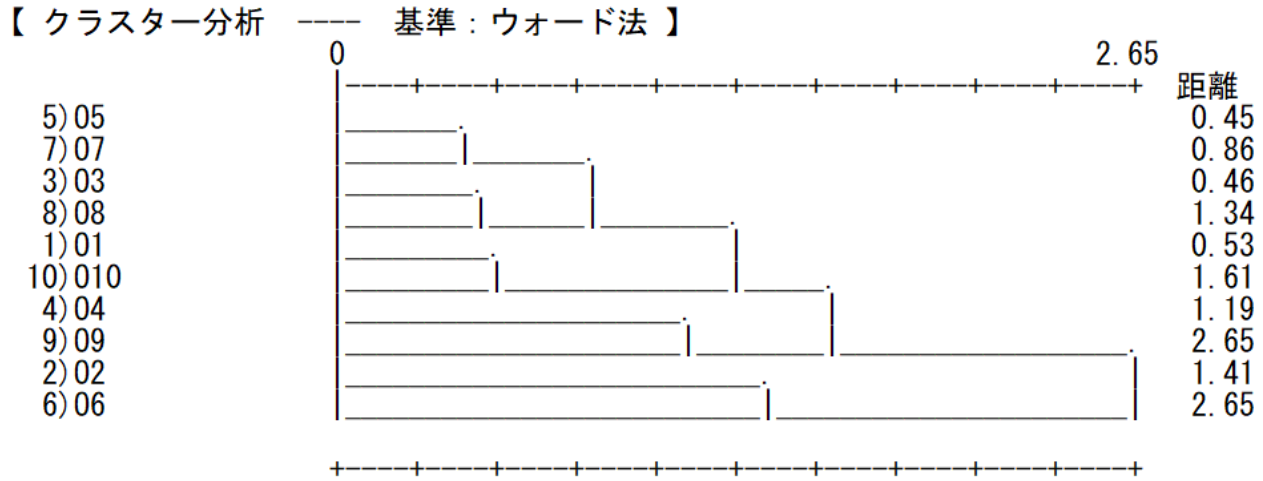


図4　対象者Cのデンドログラム

## 5. まとめ

「あなたが、教師として実際に教育現場に立ったことによって、考え方や気持ちの変化、気づきに関連することならどんなことでもよいので、頭に浮かんできたイメージや言葉、文章を思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください。」という教示のもと自由連想が促され、４人の対象者はそれぞれ思いつくまま言葉や文

章を書き出していった。そして、その反応項目をデータ処理し、クラスター分析のデンドログラムを見ながら、対象者自身が意味づけしたものが上記「４.結果と考察」である。

それによると、Aは、教育現場は学校や地域、時代によって大きく異なるという「違い」を強く感じており、教育現場の「多様性」を強く意識している。

Bは、多様な生徒の存在と多様な教師の仕事を強く意識していて、Aと同様「多様さ」がキーワードになっている。

Cは、生徒は一人一人違うので、生徒理解と生徒指導の難しさを感じる反面、教師の仕事の楽しさや充実感を感じている。また、自分が生徒からどう見られているかも気になり、自分なりの教師像みたいなものが必要な気もしている。そして、教育現場に立つと常に自分が試されている気がしており、自分の力量不足を感じるとともに、教師としての責任も感じている。そして、学生時代に、自分はなぜ教師になりたいのかを突き詰めておくことはその後の壁や挫折を乗り越えるために大切だと述べていて、学生時代というモラトリアム期の中で、とりあえずのアイデンティティの確立の必要性を指摘している点は注目される。

Dは反応項目１０項目全てが｛仕事」に関する内容で、教師として採用され学生時代とは違う仕事というものを強く意識して生活している様子がうかがえる。社会人・職業人として、教育現場に立った初任教師が教育という「仕事」を強く意識し、キャリアのスタートとして、仕事中心の生活を送っていることがよくわかる反応であった。

以上のことから、初任教師４名に共通することは、①学生時代の教師イメージと実際の教師像の「違い」への気づきであり、②教育現場にはいろいろな生徒・いろいろな教師・いろいろな仕事があるという「多様さ」への気づきであった。また、③社会人・職業人として「仕事」への意識（責任感や充実感、多忙感等）の高まりも認められた。

しかし、一方においては、④その問題解決のための方法の探索や解決のためのスキルの獲得までには至っていない。また、思った以上に教師の仕事は多様で多忙であるが、そこに楽しさや充実感も感じているため、⑤仕事とプライベートの切り替え、自己管理、や仕事管理、その克服や多忙感からの脱却にまでは意識が及んでいない。

初任教師は、学生時代に描いていた教師像と実際に教育現場で働く教師の姿に、大きな違いがあることに気づき、その多様さに理解も示しているが、それらに対応するための方法やスキル獲得が次の課題と思われる。また、仕事中心、学校中心の生活は、やがて限界を迎えることになるので、それ以前に時間管理や仕事管理の力量を高め、仕事とプライベートの切り替えやバランスの取れた働き方が出来るようになることが、燃え尽き症候群を防ぐためにも必要である。

## 引用・参考文献


1) 中央教育審議会2011「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」
2) 浅野良一　2007「ステップアップ学級組織マネジメント」第一法規
3) 安井克彦　2013「教師のキャリア発達と力量形成に関する研究」名古屋学芸大学研 究紀要
4) 案浦信子　2008「高校英語教師のキャリアの連続的発達ーインタビューに基づくライフヒストリー分析を中心にー」
5) 斎藤俊則・都丸けい子・大野精一　2010「初任教員の教師キャリア等に関する探索的調査研究」日本教育大学院大学教育総合研究
6) 河野由佳　2011「若手教員の資質・能力のさらなる向上を目指して」京都市総合教育センター
7) 内藤哲雄　1997「PAC分析実施入門～個を科学する新技法への招待」ナカニシヤ出版
8) 長谷川恵子　2001「不登校生徒の関わり体験が適応支援者に及ぼす機能」弘前大学大学院

修士論文
9) 佐藤昭雄　2001「不登校児童生徒との関わり体験が教師に及ぼす機能」弘前大学教育学部附属教育実践総合センター研究員紀要
10) 新館啓一・松崎学　2010「教師のPAC分析による自己成長の振り返りの研究」山形大学教職・教育実践研究
11) 佐藤昭雄　2005「カウンセリング体験がクライアントに及ぼす機能」弘前大学教育学部附属教育実践総合センター研究員紀要
12) 佐藤昭雄　2008「PAC分析を用いた教育分析の試み」日本教育心理学会第50回発表論文集

## 要　旨

初任教師４名を対象に、教師として実際に教育現場に立ったことによって生ずる、考え方や気持ちの変化、気づきを、PAC 分析の手法を用いて明らかにした。初任教師４名に共通することは、①学生時代の教師イメージと実際の教師像の「違い」への気づきであり、②教育現場にはいろいろな生徒・いろいろな教師・いろいろな仕事があるという「多様さ」への気づきであった。また、③社会人・職業人として「仕事」への意識（責任感や充実感、多忙感等）の高まりも認められた。

しかし、一方において、④その問題解決のための方法の探索や解決のためのスキルの獲得までには至っていない。また、思った以上に教師の仕事は多様で多忙であるが、そこに楽しさや充実感も感じているため、⑤仕事とプライベートの切り替え、時間管理や仕事管理、その克服や多忙感からの脱却にまでは意識が及んでいない。

**キーワード**：教師，キャリア発達，PAC分析